

## (別紙2)

### 論文審査の結果の要旨

氏名 矢澤 知行

矢澤知行氏の論文「モンゴル時代の兵站政策に関する研究——大元ウルスを中心として」は、中央ユーラシアに巨大な帝国を築いたモンゴル・ウルスの特質を解明するために、この帝国を支えた軍事力の問題、とりわけその兵站政策を大元ウルスを事例として総合的に検証することを目的としている。論文は、問題の所在を示し、研究史の整理と史料の提示を行う序論、モンゴル以前の中華諸王朝および西アジアのイスラーム諸王朝における兵站政策を通観する第1章、モンゴル初期の兵站（アウルク）を確認する第2章に続き、大元ウルスにおける兵站政策の展開を南宋攻略の過程に即して実証的に検討し、かつ兵站の問題を軍戸制や社制、屯田、軍民異属の制度などの社会経済システムとの関連において幅広く検討した第3－6章の本論部分、大元ウルスと西アジアに成立したフレグ・ウルスとの兵站政策の比較を行う第7章、そして大元ウルスの軍人を中心に今後の研究の見通しを示した第8章、以上のあわせて9章から構成されている。

大元ウルス、いわゆる元朝の軍事制度については、これまで数多くの研究が、『元史』や『元典章』『通制条格』などの漢文史料とラシードウッディーン『集史』などのペルシア語史料に基づいて積み重ねられてきた。しかし、これらの研究の多くは、アウルク、奥魯、屯田、社制、軍戸制などの個別のテーマの中に閉ざされる傾向が強かった。これにたいして、本論文は、本来遊牧のモンゴルが中華の定住地域を征服、統合してゆく過程で兵站のシステムをどのように編成していったのか、という動態的な観点から、先行研究を批判的に読み直し、前述の問題を総合的にとらえようとした労作である。とくに、奥魯制の展開を歴史的にあとづけたことや、クビライによる河南江北の大規模な屯田政策は対南宋戦の軍糧補給のみならず、旧南宋軍や流民にたいする社会救済的な役割も担ったことを明らかにした点は、高く評価される。また、大元ウルスの兵站政策を歴代の中華王朝のそれとの比較で考察しようとする姿勢や、西アジアのフレグ・ウルスのイクター制度との比較を試みている点は、著者の幅広い問題関心を示すとともに、今後の研究の展開を大いに期待させるものである。

一方、本論文の中で提示された漢文およびペルシア語史料の読みや表記については少なからず誤りが認められる。これらは行論を妨げるものではないが、すみやかな修正が求められる。また、より緻密な分析や合理的な解釈が求められる箇所も散見される。しかし、本論文は、その総合性と開拓性において従来の研究水準を明らかに超えるものであり、博士（文学）の学位を授与するに十分値する博士論文であると判断する。